

葬送儀礼

水原渭江・著

生と死の相対的な問題は、生の存在がある限り消えることのない永遠の課題である。死という悲しみを癒し、末世の再生を祈る儀式が葬送の儀礼であり、そうした儀礼を司るのが、僧伽である。

屍の除霊を行ない、その霊魂の再生を願う僧伽の役割にも、純粋な意味での覚醒が問われなければならない。また、施行される葬送の儀礼は、純粋で、誠実な質の価値観が問われなくてはならない。それには虚飾にはしらず、素純でなくてはならない。僧伽の営利主義にはしってはならない。敦き信仰の倫理性が失われると、葬送する遺族の不審と怨恨を招くことになる。

こうした現実の葬送の儀礼をみる時、日本で、鎌倉時代の高僧たちによって開基された各宗によって形成される教団が、世襲化し「道」を歩むことに怠惰で、社会の時俗に汚染された求道者の擬善性と葬送専職者の営利主義の二つが複合し、葬送儀礼は、最近、年ごと虚飾化し、世にいう末世的偽葬とも称すべき情況になり、質実で、純粋で、素朴な原始仏教のあるべき姿を全く喪失している。死者も葬送の遺族も、救われるところがない。

このような現在の現象は、すでに徳潤な仏者からは、指摘されて

久しいが、かかる原因は、僧伽の無自覚を真摯な求道者としての価値観を意識しないところから生じているのであって、惰性に委ね、信仰を自ら覚悟しない僧伽の葬送儀礼が、屍の処理の通過儀礼に堕ちているからである。

いかほどに彩られようとも、その宗教における精神の質が問われる葬送儀礼でなければな、深くて純粋な信仰に酬われる葬送とはならない。その祈りに期待することはできない。

私は、心に深く反省を繰り返すが、こうしたことを是正するには、宗教者の世襲制と宗派による頑迷な檀徒制度の解体しか、その希望の光は見えてこない。宗教界の古い体質と封建制が、人間の純粋な精神を踏みにじっているといわざるを得ない。

水原渭江

国立香港大学・文学博士、上海華東師範大学・顧問教授、蘭州大学・客員教授、南京師範大学・客員教授、南京・東南大学・客員教授、北京・神州大学・名誉教授、北京日本科学文化研究所教授、香港大学饒宗頤学術館名誉研究員、香港大学水原琴窗、渭江兩代学藝文献室